

## 立原道造論

### — 信濃追分詩編の成立背景と受容の一面 —

小野 孝 尚

はじめに

I、昭和九年七・八月「村ぐらし」

II、昭和十年二月「小さな墓の上に」

III、昭和十年八月「天の誘ひ」

IV、昭和十年十一月「はじめてのものに」「ゆうすげびと」「のちのおもひに」

はじめに

夭折の詩人・立原道造の詩作品の特色は、叙情性豊かで、近代叙情詩の一つの頂点を成しているものと思われる。

若々しさ、初々しさ、優しさが、詩の裏付けになっており、詩に於ける音楽性がよく整って見事に実現されている。これらは、西欧の詩のソネット形式が道造の詩の音楽性の母体となっているものである。

おしなべて若い人好みの優しさ溢れる整った抒情詩と言えるであろう。本稿に於いては、立原道造の信濃追分での詩作品を中心として、その

詩作品成立の背景や詩作品からの受容の一面を述べてみたい。

I、昭和九年七・八月「村ぐらし」

立原道造の遠祖は、水戸藩に由来し、東京日本橋を故郷とするが、転地療養とその詩精神が求めた心のふるさととして、大学生になって以来、毎年夏になると信濃追分の自然の中で暮らした。

当時の信濃追分は、現在のようには観光化はされておらず、実際にはさびしい寒村であったという。しかし立原道造の心の中では、メルヘンの村・のどかで美しい西洋風の田園風景として存在していた。

そこには又、関鮎子や横田ケイ子や今井治枝といった少女たちをベースにした立原道造の詩的少女像を持つ恋人にも会える場所であった。立原道造の信濃追分での有名なソネット形式の抒情詩には、あちらこちらに彼女たちの姿が見え隠れしている。

立原道造の詩作品は、抒情性豊かで、近代抒情詩の一つの頂点を示すものになっているように思われる。その若々しさ、初々しさ、優しさが、詩の裏付けになっており、詩に於ける音楽性が良く整って、見事に実現

されている。これは、西欧の詩のソネット形式が道造の詩の音楽性の母体となっており、若い人好みの優しさに溢れ、整った抒情詩と言える。

ここでは、『立原道造全集』（角川書店）の第五巻の書翰と第六巻の年譜を参照しながら立原道造の追分での生活とその関連した詩作品を見ていきたい。

昭和九年大学一年生の夏、立原道造二十一歳は、七月二十二日、午前十時発の列車で、初めて信濃追分に赴く。堀辰雄、室生犀星を訪ね、二十三日から二十五日にかけて神津牧場・志賀・岩村田・小諸のコースを辿って、二十五日の夜は、追分に宿泊。以後八月二十日まで追分に留まって、初めての〈村ぐらし〉を経験する。

この夏、追分には、近藤武夫が来ていて、近藤は、油屋が満員だったので、立原に油屋の向かい側、三軒程西下手の民宿若菜屋を紹介した。中甸には、油屋に移っているらしい。道造はこの最初の〈村ぐらし〉の折に、関鮎子を知った。道造は鮎子のことを「アンナ」「アンリエット」等とも呼んでいるが、鮎子は、追分の旅館永楽屋の孫娘で当時十八歳。道造は、鮎子とこのことを、この年の『四季』第二号（十二月号）に発表した連作詩「村ぐらし」の中で、

### 村ぐらし

郵便函は荒物店の軒にみた  
手紙をいれに 真昼の日傘をさして

別荘のお嬢さんが来ると 彼は無精者らしく口をひらき  
お嬢さんはかなしくなり ひっそりした街道を帰って行く

\*

道は何度ものぼりくんだり

その果ての落葉松の林には

青く山脈が透いてゐる

僕はひとりで歩いたか さうぢやない

あの山脈の向うの雲を 小さな雲を指さした

\*

虹を見てゐる娘たちよ

もう洗濯はすみました

真白い雲はおとなしく

船よりもゆつくりと

村の水たまりにさよならをする

\*

あの人は日が暮れると黄いろな帯をしめ

村外れの追分け道で 村は落葉松の林に消え

あの人はそのまゝ、黄いろなゆふすげの花となり  
夏はすぎ………

郵便箱を擬人化し、そしてメルヘン的に表現する。お嬢さんは、東京あたりの人か、あるいは鮎子かも知れない。思いつめた手紙を函に入れたので、張り詰めた気持ち、プツンと切れ「かなしく」なったのであろう。

「僕はひとりで歩いたか さうぢやない」連れがあつた。「あの山脈の向うの雲を 小さな雲を指さし」連れに見せた。の部分から鮎子をチラッと点出登場させている。

黄色は、鮎子の好きな色であろうか。そして「黄いろな帯をしめ」道造に会いに来る。「ゆふすげの花」は、道造の好きな花、黄色な帯をしめた少女が、それにかわる。

## Ⅱ、昭和十年二月「小さな墓の上に」

### 小さな墓の上に

失ふといふことがはじめて人にその意味をほんたうに知らせたなら。

その頃、僕には死と朝といちばんかがやかしかつた。そのどれも贖の姿をしか見せなかつたから。朝は飽いた水蒸気の色のかげに、死は飾

られた花たちの柩のなかに、しづまりかへつてめいめいの時間を生きてゐたから。

すなほな物語をとざしたきり、たつたひとりの読む人もなく。骨に贖を彫りつけて。

なくなつた明るい歌と、その上にはてないばかりの空と。ことづけ。

墓の上にはかういふ言葉があつた――

たのしかつた日曜日をかざしに行つた

木枯らしと粉雪と僧院に捕へられた

それきりもう帰らなかつた。一生黙つて

生きてゐた人、ここに眠る。

自分の死をいうことなく、失われるということが、初めて誰にでも、その意味を知らせたなら、(世を去ることの意味)その人はどんなふう(どんな気持ちに打たれるのだろう)思うだろう。

朝、一番明るくきらきらとうらうらと光り溢れる。朝はこれから一日が始まる。

死を恐れたり、嫌がつてはいない。(いい所があるんだ)

朝もこれから始まり、死もこれから始まる。そのどちらも贖の姿しか見せなかつたから、輝かしく見えた。(死と朝が)

本当の姿をどちらもなかなか見せてくれない。

朝はもう見飽きた。薄明るく水蒸気色のそのかた影に、静まりかえって自分の時間を生きていくから。

死は、美しい花々に飾られた柩に、死はしいんと静まりかえって、朝は朝。死は死がそれぞれ、てんでんばらばらの時間を過していたから、輝かしかった。

そこでは、素直な優しい、良いお話(本)をそこまでとじたつきり、たった一人も読む人もなく終わりとなるであろう。残る遺骨に、長かつた生ける日のいろいろなあのこと、このことをしつかり彫りこんで。

又、今はもう終わってしまった明るい、優しい歌。それら(骨や歌やお墓)の上には、限りなく続く程の空。そして最後にあの人に(の)残した言葉。ことばのことづけ。ことづけだけが、空の上にある。

墓誌名があった。子ども時分、少年期。私は、たった一人あの楽しかった日曜日をもう一度体験したい。と探しにいった。その日は、寒さと、惨めさ、暗さ、冷たさのひどい木枯らしと、暗い空から落ちてくる粉雪。又その人の行き着く所(僧院)に捉えられて、もうそれきり、もう人の世には戻ることはなかった。

私という、一生の間、大して自己主張もせず、黙って、素直に二十数年をこの世の中に生きていた人、私はここに眠る。そう私は墓の上に書く。

死んで行くことを子どもらしく空想性と叙情性をもって見事に書き上げている。

若くして亡くなった道造を気の毒に思えてならない。

### Ⅲ、昭和十年八月「天の誘ひ」

#### 天の誘ひ

死んだ人なんかあないんだ。  
どこかへ行けば、きつといいことはある。

夏になつたら、それは花が咲いたらといふことだ、高原を林深く行かう。もう母もなく、おまへもなく。つつじや石榴の花びらを踏んで。ちようどついこの間、落葉を踏んだやうにして。

林の奥には、そこで世界がなくなるところがあるものだ。そこまで歩かう。それは籠をめぐつて山をこえた向うかも知れない。誰にも見えな  
い。

僕はいろいろな笑い声や泣き声をもう一度思い出すだらう。それからほんとうに叱られたことのなかつたことを。僕はそのあと大きなまちがひをするだらう。今までのまちがひがそのためにすっかり消える。

人は誰でもがいつもよい大人になるとは限らないのだ。美しかったすべてを花びらに埋めつくして、霧に溶けて。

さようなら。

死んだ人なんていないんだ。——いい所に行けるのだということ、人生観の一つ、童話的・メルヘン的思考である。

どこかへ行ったならば、そこにはあの人もこの人も居たり。そのほかにもいいことがたくさんある。

夏になったらということは、それは、花が咲いたら（夏の象徴）ということだ。私は、高原の林を奥深く行こう。その時、私には、もう母もなく、おまえもなく。つつじや石楠花の花びらを踏んで林深く行こう。ちよど去る秋の落葉を踏んだようにして林深く行こう（位置）。

林の奥を行くと、そこでこの世界がなくなる所があるものだ。そこまで歩こう。世界がなくなる所、死後の世界は、麓を巡って山を越えた向こうかも知れない。自分でも見えない。誰にも見えない。

そこでは、きつと僕は、色々な笑い声（人との喜び、笑い、楽しさ、出会い、対話、明るさ、輝かしさ（母、あの人））や泣き声（悲しみ、悔やみ、つらさ、哀愁、別れ）（主に自分）を死ぬ前にもう一度）思い出すだろうと推測している。

それから本当にしかられたり、非難されたり、とがめられたり、いやがられたことのないことをもう一度思い出すだろう。

（いい人僕は、その後、大きな間違いをするだろう。——病をまねき、命を落とす（自分にも責任がある）不注意。今までの間違いがそのためにすっかり消えるような大きな間違いをするだろう。）

人は、誰もがいつもいい大人——子どもはいつもいいのだが——になるとは限らないのだ。美しかった総て——いよいよこの世を去るときはの気持ち。母との思い出。故郷東京の街。笑いで明け暮れた楽しい暮らし。

し。山林での人との出会い、交わり、微笑み、——をつつじや石楠花などの花びらに埋め尽くして、霧（薄暗さ、寂しさ、孤独、暗さ）に溶けて。（私の美しく良かった楽しかったいいこと総てを花びらの下に埋め尽くして、立ち込めた先の良く見えない、霧の中に溶けこんでなくなる）さようなら。

私は、総てのものにさようならを言って去って行くのだ。そして私は命を落とすだろう。あの人、母、父、親しかった多くの人に別れる。

散文詩的な手法といってもよいくらいの詩であり、その中でも、省略や吐き出した言葉や倒置も使われている。実に詩的に出来ている作品である。道造が詩そのものになっている。美しい創造、美しい連想。それから幼いものの良さ。それに憧れる心。それらを乗り越えようと、きつといいことだけがある。いい世界があるのだということ。一つの宗教心にも近いもので、そうでなければ、辛いものがあり、死を明るくみたい心情であったろうと思われる。須藤松雄先生は、『立原道造の自然——追分を中心として——』（昭和五十三年四月五日 明治書院）の中で「昭和九年の夏、関鮎子が、愛人として現われるようになったことが、「死んだ人なんか知らないんだ」と、歌わせることになったのではないでしょうか。」と推測されています。

IV、昭和十年十一月「はじめてのものに」「ゆうすげびと」の  
ちのおもひに」

はじめてのものに

ささやかな地異は そのかたみに

灰を降らした この村に ひとしきり

灰はかなしい追憶のやうに 音立てて

樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきつた

その夜 月は明かつたが 私はひとと

窓に凭れて語りあつた（その窓からは山の姿が見えた）

部屋の隅々に 峡谷のやうに 光と

よくひびく笑ひ声が溢れてゐた

——人の心を知ることとは……人の心とは……

私は そのひとが蛾を追ふ手つきを あれは蛾を

把へようとするのだらうか 何かいぶかしかつた

いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか

火の山の物語と……また幾夜さかは 果して夢に

その夜習つたエリーザベトの物語を織つた

八月五日、浅間山爆発。「けさ浅間の爆発にはじめて立ち会つた。それは雲の絶間から眺められたのだが、りっぱなものであつた。地異とはまたすさまじいものであらう。」（書簡、狩野謙二宛 昭和十一年八月五日）

八月十六日、道造から誘いをうけていた柴岡玄佐雄が追分に来る。翌十七日柴岡の縁者の別荘に招かれ、そこに年若い姉妹、横田ミサオ・ケイ子がいて、道造は、その妹の少女に好意をもち、やがて彼女を「エリーザベト」と呼んだりするようになる。

八月十七日、「その夜が楽しかつた。その追想は、しかし、エリーザベトのことではないのだ。その日の夕方の追想だつた」（書簡、柴岡玄佐雄宛 昭和十一年三月十二日）

ほんの小さな地表の異変は、その形見（印）として灰を降らした。（この村にほんのしばらく灰を降らした）灰は悲しい思い出のように、さらさらと音を立てて、木々の梢に、家々の屋根にしきりと降つた。

その晩月は、明るかつたが、私はその人と窓にもたれて話しあつた。（この窓からは、月に照らされた山の姿が良く見えた）この部屋の隅々にまで、ちようど、よく音の響く谷間のように、光り（明るさ）とよく響く笑い声とが、満ち溢れていて、楽しかつた。

（だがそれもさみしく、もうそれきりのこととなつた）

——相手の人の心を知ることとは、いや人の心というものは、（捉えにくいものだ）私は、その人が、部屋に入ってきた蛾を追う手つきを見ていて、あれは蛾を捉えようとするのだらうか。それともただ無心に蛾を追っているのか。どちらともはつきりせず、なにか不思議な感じがした。

(その夜から再び会うことも語ることもなくなるだろう)

ああ、一体、いつどんな日にこの山(浅間)に初めて灰の煙が立ち始めたのか。火山についての色々なお話(あの人と煙を眺めながら、幾度か話し合ったその灰の山の物語が)又幾晩かは、思ったとおりに私の夢の中に現れ、又あの人と読み習ったエリーザベトの物語を織りつづけた。(山の物語、エリーザベトの物語を繰返し続けて夢に見た)

火の山の煙と、その人との語らい、明るく良く響く笑い声、その人の(私に対する)本当の心は、解きかねたが、初めてのあの人と、火山の話し、エリーザベトの物語、それを私は、幾晩も夢に見続けた。

### ゆうすげと

かなしみではなかった日のながれる雲の下に

僕はあなたの口にする言葉をおぼえた、

それはひとつの花の名であった

それは黄いろの淡いあはい花だった、

僕はなんにも知ってはゐなかつた

なにかを知りたく、うつとりしていた、

そしてときどき思うのだが、一体なにを

だれを待つてゐるのだろうか。

昨日の風に鳴っていた 林を透いた青空に

かうばしい さびしい光のまんなかに

あの叢に 咲いてゐた、

そうしてけふもその花は

思ひなしか 悔みのないように――。

しかし僕は老いすぎた 若い身空で

あなたを悔みなく去らせたほどに――。

あの頃、その人は、まだ去りもせず、悲しみという思いもなく、日々が流れる。その流れる日の下で、僕はあなたのよく口にする「ゆうすげ」という言葉を覚えた。ゆうすげとは、一つの花の名前であった。それは黄色のうすい淡い感じの花だった。

僕は、花の名も、そのほかなんにも知ってはゐなかつた。だが、ほのかに何かを知りたいと(何かを期待し、待つように)うつとりとした気分になっていた。そして時々考えたのは、僕はいったい何を待ち、誰を待つてゐるのだろうかということだ。

昨日の風が、林を透いた青空に音をたてていた。その香りゆかしい、しかもさびしい光の真ん中に、あの叢の中にゆうすげは咲いていた。そして、あゝ、今日もその花は咲いている。

そう思うせいか、その花は「悔」の心のようにひっそりと咲いていた。悔の悲しみの心――しかも僕は、その悲しみに老いをふかめた。(若い身空の僕が)あなたを悔の心も残さずに、すんなりと去りゆかせただけに――。

淡い、何かに心ひかれ、なんとなく心寄せたその人。その人は摘みとつて、口に出して教えてくれたその花の名ゆうすげ。僕は、この先、何かを待つとしてもなく、うっとりとして、(その先を知りたい気持ちもかすかにはあったその頃の僕の心だったが、花は名残惜しいように僕の心に残って今も咲いているけれど、もう僕から悔というほどの思いも残さず、その人は去っていった。)

淡い恋心、淡い慕いよる心と去られた後のさびしい気持ち、それらを空、自然、叢、(特にゆうすげの花)で象徴的に点出し、優しい雰囲気をかもし出している。

### のちのおもひに

夢はいつもかへつて行つた 山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠つてゐた

——そして私は

見て来たものを 鳥々を 波を 岬を 日光月光を

だれもきいてゐないと知りながら 語りつづけた……

夢は そのさきには もうゆかない

なにもかも 忘れ果てようとおもひ

忘れつくしたことさへ 忘れてしまつたときには

夢は 真冬の追憶のうちに凍るであらう

そして それは戸をあけて 寂寥のなかに

星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう

「のちのおもひに」とは、「のちのおもひにつけても」の意であり、人と別れたのちのその後の私の感慨というものである。これは、四連全文の内容をまとめて表現されており、良くできた題名と考えられる。

前にも述べたが、立原道造は、東京日本橋を故郷としたが、その詩精神が求めた詩の故郷として、大学生になって以来毎夏を信濃追分村の自然の中で暮らした。追分村は、道造の中では、メルヘンの村・のどかで美しい西洋風の田園風景として存在していた。そこには又、関鮎子や横田ケイ子、今井治枝といった少女たちをベースとした、立原道造の詩的少女像を持つ恋人とも会える場所であった。

道造の追分での有名なソネット形式の叙情詩には、あちらこちらに彼女たちの姿が見え隠れしている。けれども、昭和十一年夏、道造にとつて、かの追分村が、それまでの様相を一変してしまう出来事が起こるのである。

僕にメルヘンを贈ってくれた少女が、この月すゑに Heiraten する。追分に来るとき、その少女を偶然汽車でいつしよになり、雨の小半日を軽井沢ですごした。別れのときに、肌につけてゐた水晶のちひ



さな十字架を贈ってくれた。そして、一生涯もうお会いすることも出来ないだらうと言った。……この少女と別れたようにしてまた僕は鮎子さんとも別れねばならない。まだわがひとは この村に来てゐない。……幻像の村と結びつけてゐた美しい死も、だんだんうすらいでしまう。(書簡、狩野謙二宛 昭和十一年七月十一日)

この年の七月、今井治枝との別離があり、やがては、鮎子とも別れなければならない日がやってくる。八月に入って間もなく、どんな形でかはわからないながら、鮎子との決定的な別離が突然訪れた。それは詩人にとってい死も薄らいでしまう。この体験をして八月二十五日、夏休みは未だ残っているのに、それどころか、九月一日には、『四季』の合宿が予定されていたにもかかわらず、道造は、追分を引き上げてしまう。傷ついた心を旅に運ぶために。

あす知らぬ世のはかなさを思ふにも馴れぬ日数ぞいとど悲しき……  
定家歌集

——別れ、病気、死——そういった明日どうなるかもわからぬこの世で暮らす、人間のはかなさを思うにつけても、まだ忘れさせずに過ごす、これからおくらなければならぬ一日くが、今からいつそますますく、悲しく思われるよ——

初出には、道造の愛した定家の歌を置いた。うつつつけの歌である。

懐かしい、優しい、あの時の思い出は、かつてそうだったように、いつも、あそこに戻って行つた。あの山の麓のさびしい村に。そこでは、水引草に風がふきたち、そよそよと揺れ、草ひばりの鳴き声が、やむことなくつづく。しんと静まりかえつた、午後の林道を。

第一連は、倒置法で「夢は、林道を、村に、かへつて行つた」と夢が主語で、かえつていつたが後につづく。

うらうらとのどかに、青い空には、日が、輝いており、火山は、めだつて煙もはかず、静かに眠っていた。文頭の——線は、周りの状況から自分の方に目を向ける。

そして私は、旅先で見てきたもののいくつかの島を海の波を、岬のことを、日の光、月の光のことを、(親しみ愛情を込めて語つたその身近な人) 誰も聞いていないとは知りながら私は語りつづけた……

紀州路を巡り、奈良、名古屋、伊良子岬を訪ね、九月七日に帰京という旅あつた。「島々」は、紀州半島の島々、「岬」は、潮岬、また「日光月光」は、奈良の興福寺の日光月光菩薩であるとも、単に日の光、月の光のことであるとも言われている。

「夏の巾ひ」には、  
投げて捨てたのは  
涙のしみの目立つ小さい紙のきれはしだつた

とある。潮岬で彼は、鮎子からの決別を告げた手紙(はつきりとは、わかつていないが)を破り捨てたようである。

七日に帰京した彼は、十三日になって、突然追分に出かけた。「のちのおもひに」は、その時の追分でのことがうたわれている。追分は、美しく平和な風景ではあるが、道造とは、どこかかけはなれてしまっている。そして道造は、そこで、旅の様子を「だれもきいていないと知りながら」語りつづける。鮎子や治枝、詩的少女像の彼女たちは、もういないのだから。

私の夢、思い出、お話しは、ここで途切れる。(もうその人と関わりあうこともなく) 思い出は、その先には、もう進んではいけない。私が苦しんで、なにもかも(夢も、その人も、あの場所も、あの日のことも) 総て忘れてしまおうと思ひ、そして、すっかり忘れて、総て忘れつくしたことを忘れてしまったその時には……。

私の夢(あの人との思い出)は、ものみな、凍りはてる。真冬の冷たく、厳しく温かさない私の思い出の中に凍ってしまうであろう。そして、この私の夢は、こっそりと心の戸を開けて、ひっそりとした寂しさの中、たくさんの星々に照らされた道を寂しく冷たく過ぎ去り消えて行くことであろう。

第四連、「夢」、それは、主語で、「過ぎ去るであろう」が擬人法で推量の述語となる。夢は凍って私の心の「戸をあけて星くづにてらされた道を過ぎ去」り、私から離れてしまう。そしてやがて私も死んでしまう。

ここには、精神と肉体の分離が読み取れる。あの美しい追分で、少女たちと過した甘美な夢を詩人の肉体の追憶のうちにとどめるには、あま

りにも忍びなかつたためであろうか。

星々に照らされた道を、夢は、寂しく冷たく過ぎ去り消えて行くのである。

形式は四・四・三・三のソネットで、音楽的、叙情的であり、優しい口語体である。女性的・雅やか・優雅・清らか・純粹・清純さ等が感じられる。

道造は、追分の世界が壊れてしまつて以来、新しい彼の詩的ふるさとを求めてさまよう。あくる昭和十二年の秋には、その死につながる肋膜炎を発病し、翌十三年には、勤め先を辞め、北へ、また南へと、彼の詩精神の求めるふるさとを探して旅をする。しかし病は進行し、その旅の途上重体となり、翌十四年に短い生涯を終わる。——死ぬことに、早い遅いは無い。道造としては、充分以上の仕事を残したと考える——寂寥の中を去つて行つた夢が残していったのは、この不思議に透明な十四行詩であった。